



<菜の花や月は東に日は西に> 蕪村

3月20日の夜は、朧（おぼろ）月夜でした。移動性高気圧により日中は天気良かったのが、夕方帰宅する頃には、天気は下り坂に向かい、夜の8時頃には薄いヴェールのような高層雲が広がり、そのヴェールを通してほぼ満月に近い幻想的な朧月が東山の上に昇ってきました。蕪村が詠んだ有名な句は、まさにこのような夜だったはずです。連想ゲームのように浮かんできたのが、小学唱歌「朧月夜」（高野辰之作曲：岡野貞一歌詞）でした。

菜の花畑に 入り日薄れ  
見わたす山の端（は）霞深し  
春風そよふく 空を見れば  
夕月かかりて におひ淡し

菜の花は、3月から4月にかけて黄色い花を咲かせ、かつては、黄色いじゅうたんのよう菜の花畑が列島の至るところに広がり、典型的な春の里山風景となっていました。春のこの季節、移動性高気圧が通過して次の低気圧が来るという下り坂の天気には、中国大陸から黄砂や、最近ではPM2.5に代表される大気汚染物質が高層雲の雲粒となって霞のような雲となり、「朧月」が出やすくなります。特に、満月に近い月は、夕方から夜の始めのまだ薄日のさす頃に東の山の端近くから昇って来るため、湿った大気層を通過する光路が長く、朧月になりやすくなります。同じ時間帯に地上の「菜の花畑」もまだ薄い夕日の中でぼんやりと見えることになります。冒頭の蕪村の句や唱歌「朧月夜」にあるように、このような条件の下で、「菜の花畑」と「朧月」は結びついてこの季節の夕方風物詩となってきました。

<菜の花や摩耶を下れば日の暮るる> 蕪村

神戸の六甲山系の南斜面には、江戸時代には山からの急流を利用した水車がたくさんあり、この水車の動力を利用して菜種油を作っていました。摩耶山を含む六甲山系の麓には、菜の花畑が広がり、川の水車小屋では収穫した菜の花から菜種油を搾っていたわけです。蕪村のこの句は、そのような風景を描写しています。

「朧月」は、大陸での黄砂や大気汚染の悪化もあり、現在も春のこの時期、よく現れる現象ですが、「菜の花畑」は、めっきり減ってしまいました。江戸時代には、菜種油を行灯（あんどん）の灯に用い、炊事には、山の木を薪として切り出して使っており、これが江戸後期から明治に至る時代の、日本のエネルギー源でした。都の京都では、盆地内には菜の花畑が広がる一方、盆地周辺の比叡山から東山の山々は、薪の取り過ぎのため、図1にある

ように、はげ山状態になっていました。皮肉なことに、明治・大正・昭和とエネルギー源が石炭や石油に代わってくると共に、山での薪取りはなくなり、山の樹々は回復してきたわけです。それが高度成長経済以降、安く大量に輸入された木材のため、日本の山林の利用の極端に減り、樹々の間伐もできず、反対の意味で山は荒れ放題になってしまっています。昨年の台風での北山杉の大量倒木は、そのせいだとも言われています。（安成通信 2018.9.17 台風と災害について 参照）

いずれにせよ、江戸時代から石油・石炭の明治・大正・昭和・平成の「近代化」に伴うエネルギー利用の変化は、田園や里山の風景の大きな変化を引き起こしてきたことがわかります。これからの「脱炭素」社会に向けて、風景はさらに変化していくことでしょう。田畑と太陽光パネルの組み合わせが普通の風景になるかもしれません。（安成通信 2016/09/04 太陽光発電と野菜作りのコラボ 参照）

とはいえ、黄色い菜の花は、限定的ながら、今も食用油と野菜として栽培されており、この季節の田畑を飾っています。黄色い花をつけたままの菜花のお浸し（おしたし）は、少しほろ苦く、食欲をそそり、お酒のつまみとしてもぴったりです。そんな「春」をいつまでも楽しみたいですね。

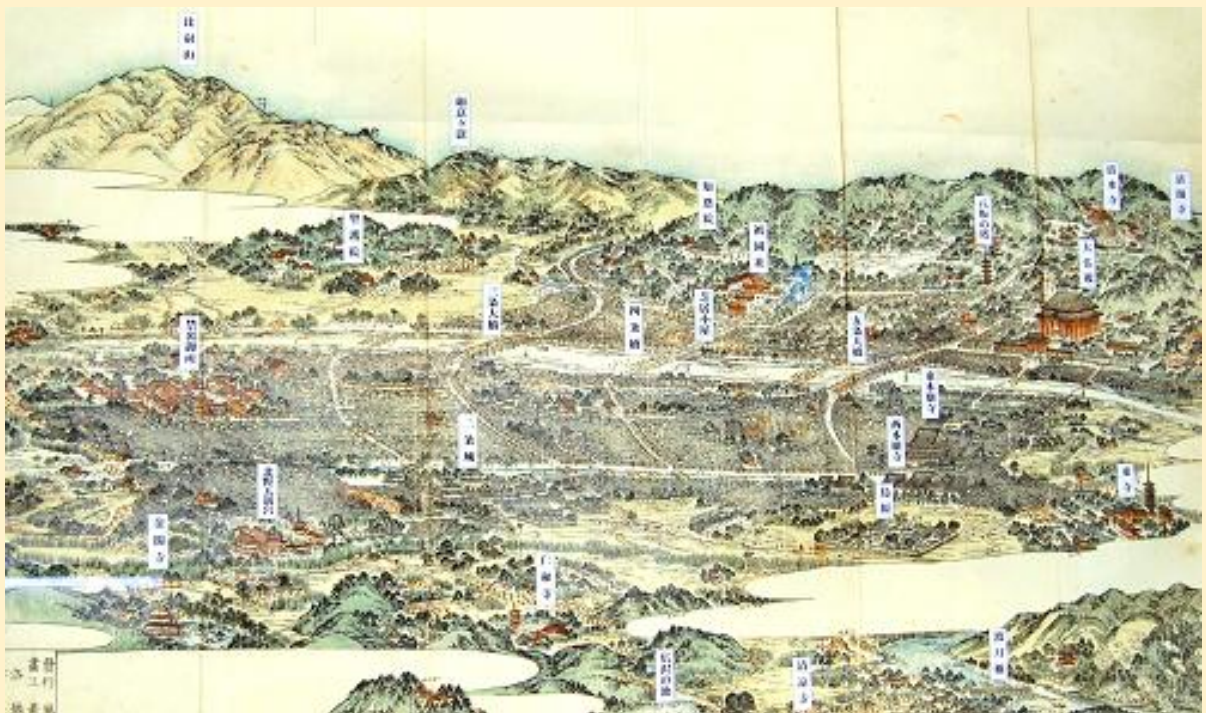


図1：京都 花洛一覽図。横山華山（黄華山）（1785～1839）作。19世紀初めの比叡山から東山連峰と鴨川を描いている。